

テーマ：「北海道の中世から江戸、そして幕末から昭和を検証する」 松前半島を語りながら周遊するバスツアー

1. はじめに

道南技術士委員会が企画する、「函館の地域産業を歴史の見地で探るツアー」も、今年で9回目となりました。今回は2度目の松前半島です。北海道の歴史を松前半島から探るといろいろな史実が浮かび上がってきます。平成18年に同じルートでツアーをおこないました。北海道の中世(江戸時代以前)を語る上で重要な地域であったことを記憶しています。今回はさらに深く北海道の歴史を掘り下げ地域の産業や街の成り立ちを探るツアーを企画しました。

今回も、函館工業高等専門学校の中村教授にガイド役をお願いし、中世から昭和までいろいろなテーマで語り合いながらのバスツアーとなりました。

2. 概要

日時：2013年11月16日(土)～17日(日)

見学場所：知内町、松前町、上ノ国町、江差町、厚沢部町

宿泊場所：松前町 矢野温泉旅館

交通手段：貸切バス 参加人数：11名

〈講師〉

歴史と産業遺産の時代的背景解説：

函館工業高等専門学校 中村和之 教授

〈行程〉

(1日目)

開拓使茂辺地煉瓦石製造跡→茂別館跡→知内郷土資料館→白神岬(北海道最南端)→松前旧波止場→松前城(福山城)→寺町→松前郷土資料館→矢野温泉旅館(宿泊)

(2日目)

旧笹波家住宅→上ノ国八幡宮→勝山館跡ガイダンス施設→州崎館跡→横山家→旧檜山爾志郡役所→厚沢部郷土資料館

3. 見学地レポート

—1日目—

函館から松前町まで左に津軽海峡と竜飛岬、その奥に岩木山を眺めながら知内町、松前町と探索する。

■開拓史茂辺地煉瓦石製造所跡

(1872年 明治5年)

北海道開拓史唯一の煉瓦石製作所の跡地である。函館元町公園にある旧函館支庁書籍庫や金森洋物店の煉瓦もここで造られたものである。



■茂別館跡(1443年 室町時代)

道南十二館の一つである。津軽十三湊城主・安藤太郎盛季が館を造ったのに始まると記されている。

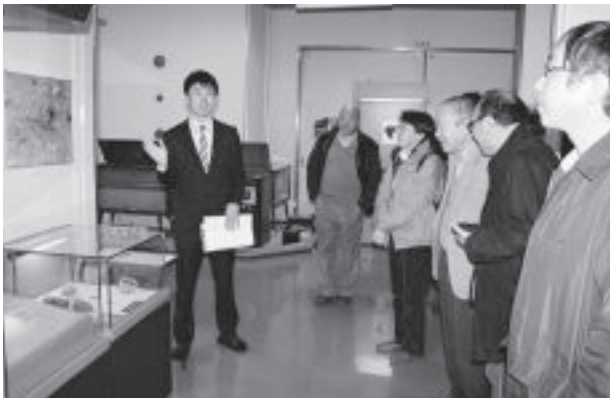
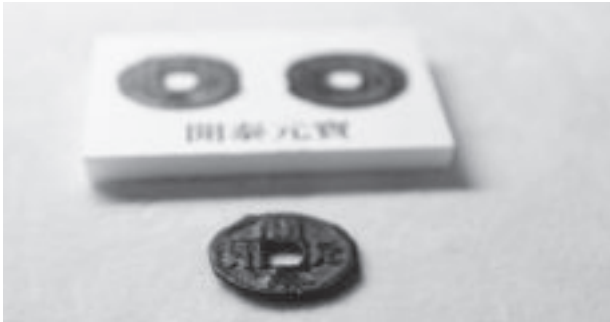
土塁の跡から当時の様子をイメージしながら現地で語り合うのだが想像力が試される。

■知内郷土資料館

中村教授が指導する函館高専の埋蔵文化財研究会が知内町の涌元古銭の中からベトナム・陳朝の「開泰元寶」(かいたいげんぼう 1324年)を国内で初めて発見した。なぜ道南にベトナムの古銭があるのか、発見者の中村教授から直接解説を受けるのはとても贅沢で貴重なお話であった。そのほんの一部…。

「おそらく、室町時代に日本に来た南蛮船が港に立ち寄った際に使ったものだろうが、ルートとしては日本海側を津軽十三湊などを經由して北上したの

だろう。埋めたのはちょうど渡島半島でコシャマインの戦いがあった時と重なり、もしかしたらそれとも関係があるかもしれない…いずれにしても、あまりにも想定外でわからないことがたくさんあるが古銭から見える歴史も大いにロマンを感じる」…。



■松前旧波止場(1876年 明治9年)

北海道初の石積商港である。浅い岩盤の上に築造されており、石積みの前面には石の角柱が数多く建てられている。石積みを波から守るための消波効果と船を繋ぐけい船柱の役割を果たしたのだろうと推測したが、どうなのだろう。



■松前城(福山城)(1854年江戸 末期)

1849年、外国船の出没に備え津軽海峡の警備強化を図るため、幕府から築城を命ぜられ、1854年に完成した日本で最後となる旧式の城である。天守



閣は1949年(昭和24年)に松前町役場から出火した飛び火により焼失したが、1961年に鉄筋コンクリート造で再建されたものである。気になったのは、石垣に使われている緑色の凝灰岩が近年急激に風化が進んで脆くなっていることであった。もともと柔らかく加工しやすい反面、風化を受けやすい石とおもわれるが、風化の進み具合が近年異常に進んでいるとのことであった。気象の影響と思われるが、急激な風化の主な原因は不明である。

また、天守閣内の展示室には84年間、所在がわからなくなっていた松前藩の宝「銅雀台瓦硯」(どうじゃくだいがけん)が岐阜県の所有者から町に200万円で購入され展示されていた。銅雀台瓦硯とは、三国志の英雄の一人、曹操が建てた宮殿で、この宮殿の瓦で作ったすずりと言われている。

■寺町(1490年～)

松前城の山側には多くの古寺や墓石が残っている。北海道で中世を実感できる場所の一つである。中でも1575年建立の光善寺、1625年建立の国指定重要文化財・龍雲院など江戸時代のままの様子を残す貴重な建造物であり、1490年建立の法源寺は道内最古の建造物のひとつとなっている。

また、国指定史跡となっている松前藩主松前家墓



所には松前藩の始祖・武田信広から19代にわたる藩主とその正室と側室、子の墓石が並んでいる。特徴的なのは石造りの屋形風覆屋(やかたふうおおいや)に収められている。墓石を前にして年代別に解説を受けたがここだけで1日を費やせるだけの情報量があることを実感した。

—2日目—

松前町矢野温泉旅館を出発し、松前町から上ノ国町まで日本海側の海岸段丘の上を走る国道228号を、左に小島、大島と奥尻島を眺めながら北上し、上ノ国町から江差町、厚沢部町と探索した。

上ノ国町では、上ノ国町教育委員会 文化財グループ 淵田氏のガイドで町内の施設を見学させて頂いた。

■旧笹波家住宅(1857年 江戸末期)

笹波家は代々鯉(ニシン)漁などを営んできた旧家の一つで、初代は1700年前半(享保年間)に能登国笹波村(現石川県珠洲市)から松前福山に渡ったとされ、後に上ノ国に移り住み、旧笹波家住宅は、19世紀の前期に五代目久右衛門が建てたといわれる。

平成4年に国の重要文化財に指定され、北海道で現存する民家では最古に属し、日本海沿岸に残る鯉



番屋の原形と言われている。

■上ノ国八幡宮(1770年 江戸時代中期)

1473(文明5)年に武田信広が「勝山館」に鎮護神として祀ったもので道内に現存する神社建築では最古である。

本殿は1770(明和7)年の建立で北海道内に現存する神社建築では最古に属する。



■勝山館跡ガイダンス施設(1462年～室町時代)

勝山館は、武田信広(松前氏の祖)が、15世紀後半に築いた山城で、16世紀末頃まで武田・蠣崎氏の日本海側での政治・軍事・北方交易の拠点となっていた。瀬戸・美濃焼・中国製青磁などの5万点をこえる国内外産陶磁器や金属製品、木製品など10万点余りの出土品、建物・井戸・空壕・橋などの跡が多数見つかっている。また、当時アイヌの人々が使っていた500点余の骨角器が出土していることなど、アイヌと本州人が混住していたことがわかっている。

施設は、その当時の中世の町並みのジオラマや発掘されたお墓の復元展示など、わかりやすくガイダンスされている。(上写真:ジオラマ 下写真:整備された勝山館遺跡)



■州崎館跡(1457年～室町時代)

1457年、コシャマインの戦いで功をあげた武田信広が上ノ国守護であった蠣崎季繁の養女である安藤政季(あんどうまさすえ)の娘を妻とし、同年築いた館であると記されている。ここから真正面、天の川を渡ったところの山の上に勝山館、その下に花沢館がすぐ見える。花沢館は道南12館の一つである。



■横山家(1786年 江戸時代中期)

昼食はここ横山家で当時のままの味を受け継ぐ鯉そば。胃袋にも歴史の味で…となった。



■旧檜山爾志郡役所(1887年 明治20年)

北海道庁の出先機関である郡役所と警察署の業務を執り行う建物として、明治20年(1887年)に建てられて洋風建築。



4. おわりに

道内の郷土資料館の多くは、縄文時代からいきなり明治、大正、昭和となります。中世が無いのです。実は歴史がないのではなく、知らないだけで、そこにはダイナミックに歴史が動いている。そんなことを大いに実感したツアーとなりました。

最後に、上ノ国町教育委員会の淵田氏、突然の訪問にも快く対応してくださった知内町郷土資料館の皆さま、そして2日間ガイド役をしていただいた中村教授に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

